

トラーの改革者、主のしもべなるイエシュア

【聖書箇所】 マタイの福音書 12 章 15～21 節

ベレーシート

●前回と前々回の「安息日問題」—安息日に「穂を摘むこと」と「人を癒すこと」—を巡って、律法(トラー)理解に対するイエシュアとの決定的な相違を知ったパリサイ人たちは、会堂から出て行って、どうやってイエシュアを殺そうかと相談しはじめたとあります。これはイエシュアの働きに対する彼らの最終的な決定と言えます。パリサイ派の人々というのは本来、イスラエルで最も聖書に熱心で、モーセの律法(トラー)をだれよりも徹底し純粋に守ろうとした人たちで、旧約宗教の華と言われたほどでした。ところが彼らは自分で掘った穴に落ちてしまい、イエシュアの言っていることが全く理解できません。「あいつは神の律法を破り、律法を侮辱する者だ。自分たちの宗教的伝統と慣習を守るためには、あいつを殺さなければならぬ。」、そのように確信した彼らがイエシュア殺害の相談を始めたというのが 12 章 14 節でした。それに対するイエシュアの行動が 15 節以降に記されています。そこを読んでみましょう。

【新改訳 2017】 マタイの福音書 12 章 15～16 節

15 イエスはそれを知って、そこを立ち去られた。すると大勢の群衆がついて来たので、彼らをみな癒やされた。

16 そして、ご自分のことを人々に知らせないように、彼らを戒められた。

●イエシュアは「それを知って、そこを立ち去られた」とあります。これは敵対する者の思いを知って、彼らとの距離を置く行為でした。いたずらに敵対者を刺激せずに、神のみこころを伝えるための知恵です。イエシュアのやるべきことはまだ残されており、神の時ではなかったからです。一方、そんなことをまったく問題視しない大勢の群衆たちは癒しを求めてイエシュアの後について行きます。そんな彼らをイエシュアは癒されましたが、同時にイエシュアは自分のことを人々に知らせないようにと彼らを戒めています。

●水と油は決して交わらないように、これから先は、宗教指導者のパリサイ人たちだけでなく、大勢の群衆たちまでも、神のご計画とみこころを伝えようとするイエシュアとの食い違いがはっきりとしてきます。イエシュアが神の思いを正面から伝えようとすればするほど、パリサイ人たちの怒りは燃え上がり、群衆たちも意味が分からずに失望していきます。ですから私たちはイエシュアの語られる神のみこころの深みを、これまで以上に正確に理解して読み取らなければならないのです。もっともこのためには御霊なる働きが不可欠なのです。御霊はイエシュアを信じる者に与えられる神の最高のプレゼントです。なぜなら、御霊は神の視点に私たちを立たせてくれる唯一の助け手だからです。その方の助けによって、私たちは神の隠された世界にますます導かれるようになります。というよりは、神が隠されているのではなく、私たちに覆いがかかっているために神の視点が見えないだけです。ですから私たちは自分たちの中にある「理

解の型紙」が打ち破られるように、心を柔軟にして、御霊の助けを求めなければなりません。

●マタイの 12 章 17 節に「これは、預言者イザヤを通して語られたことが成就するためであった。」とあります。「これは」とは、メシアがイエシュアであることを正しく理解するためという意味です。「預言者イザヤを通して語られたこと」とは、マタイが引用しているイザヤ書 42 章にある「主のしもべ」の歌です。この歌を通して、「主のしもべ」こそ、イエシュアなのだと言っています。この「主のしもべ」のことをヘブル語では「エヴェド・アドナイ」(הַעֲבֹדִים יְהוָה)と言います。イザヤ書では「わたしのしもべ」(「アヴディー」עֲבָדַי)で単数です。この「アヴディー」(עֲבָדַי)こそ、神の遣わされたメシア・

イエシュアであると理解した人は当時のユダヤの世界ではほとんどいなかったと思われます。今日のユダヤ人の中でも、一部のユダヤ人(=メシアニック・ジュー)を除いてはいません。このメシアニック・ジュー(=イエシュアをメシアと信じる人たち)は今でもユダヤ人からかわりを断たれ、嫌われているのです。

●さて、今回はマタイが引用しているイザヤ書 42 章に預言されている「主のしもべ」こそ、預言されたメシアなるイエシュアなのだということを理解したいと思います。マタイ自身もこのことを御霊によって知らされたのです。まずはテキストそのものを読んでみましょう。そしてあなたが一番心惹かれることを少し時間を取って選び出してみましょう。ここではマタイ 12 章 18～21 節に引用されたものと、引用元のイザヤ書 42 章 1～4 節を比較できるように載せたいと思います。太字の部分はマタイに引用されたギリシア語をヘブル語訳に、引用元のイザヤ書ではそのままのヘブル語で示しています。ヘブル語をベースにして読み比べますが、煩わしいと思われる方は、ご自分の聖書を開いてご覧ください。

1. 預言された主の「しもべ」の務め

【新改訳 2017】マタイ 12 章 18～21 節

18 「見よ(הִנֵּה)。わたしが選んだ(בָּחַרְתִּי)わたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ(הִצִּיחַ)わたしを愛する(אֲהַבְתִּי)者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は異邦人(גוֹיִם)にさばき(טֹפֵף)を告げる(אֲדַבֵּר)。

19 彼は言い争わず、叫ばず、通りでその声を聞く者もない。

20 傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともない。さばき(טֹפֵף)を勝利に導く(אֲדַבֵּר)まで。

21 異邦人(גוֹיִם)は彼の名(שֵׁם)に望みをかける

(לְהִלָּךְ)。」

【新改訳 2017】イザヤ書 42 章 1～4 節

1 「見よ(הִנֵּה)。わたしが支える(אֲחַזְקֶנּוּ)わたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ(הִצִּיחַ)わたしを選んだ(בָּחַרְתִּי)者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々(גוֹיִם)にさばき(טֹפֵף)を行つ(אֲדַבֵּר)。

2 彼は叫ばず、言い争わず、通りでその声を聞かせない。

3 傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともなく、真実をもってさばき(טֹפֵף)を執り行つ(אֲדַבֵּר)。

4 衰えず、くじけることなく、ついに地にさばき(טֹפֵף)を確立する(אֲשִׁיב)。

島々(אִיִּים)もそのおしえ(תּוֹרָה)を待ち望む (יִחְלֹו)。」

(1) 語彙の説明

●比較して見ると分かるように、内容的に全く正確な引用でないことが明らかです。ではマタイはギリシア語の七十訳聖書(LXX)から引用しているのかと言えば、それも正確でもないのです。LXX訳はヘブル語本文ともかなりの部分が異なります。例えばイザヤ書 42 章 1 節の「見よ、・・・わたしのしもべ」を、LXX 訳は「見よ」が消えて「ヤコブはわたしのしもべ」と解釈して訳しています。マタイはこの部分の「ヤコブ」を除いています。またヘブル語本文にある語彙も少し変えています。例えば「支える」を「選んだ」というように。要するに、マタイはLXX訳からそのまま引用してはいないということです。しかし今回はそうした違いを研究することが目的ではないので、できるだけヘブル語本文からメッセージを汲み取ることと専念したいと思います。以下、マタイとイザヤ書のテキストにある語彙を簡単に説明します。

① マタイの「見よ」と訳された「ヒンネー」(הִינֵנִי)と、イザヤ書の「ヘーン」(הֵן)は語幹が同じです。預言書で「見よ」という「ヒンネー」(הִינֵנִי)、あるいは「ヘーン」(הֵן)があるときは要注意です。それは「終わりの日」に起こる出来事を指し示している語彙だからです。特にここでは「主のしもべ」に焦点が置かれています。ギリシア語は「イドゥー」(Ἰδοὺ)です。このマタイの福音書の講解説教ではこの語彙をととても重要視しています。なぜなら、御国の視点から解釈する上での重要語だからです。

② 「主としもべ」の関係を表わす表現も異なります。イザヤ書では「わたしが支える(תְּמַנְנִי)わたしのしもべ」、「わたしの心が喜ぶ(תְּצַחֵנִי)、わたしの選んだ(בָּחַרְתִּי)者」とあるのに対し、マタイでは「わたしが選んだ(בָּחַרְתִּי)わたしのしもべ」、「わたしの心が喜ぶ(תְּצַחֵנִי)、わたしの愛する(אֲהַבֶּנְךָ)者」となっています。いずれにしても、しもべに対する主の主権的なかかわりはゆるぎないものであることが分かります。この「しもべ」が御子イエシュアを表わしているなら、「わたし」は父なる神ということになります。

③ 「彼の上にわたしの霊を授け」という部分はイザヤ書もマタイも共通しています。ここでの「彼」とは「しもべ」のことで「イエシュア」を指し、「わたし」は御父、「わたしの霊」とは「御霊」(רוּחַ)を指すと考えられます。なぜなら、「神が遣わした方(=イエシュア)は、神のことばを語られる。神が御霊を限りなくお与えになられるからである。」(ヨハネの福音書 3:34)とあるからです。神のことばを語るためにそこに御霊が働いておられるのです。三位一体という言葉がなくても、ここに神の三つのペルソナ(位格)のかかわりを通してそれぞれの働きが啓示されています。

④ 神のことば(λόγος)を語ることによって、メシアなるしもべは「さばき」を行われます。イザヤ書では「さばき」ということばが 3 回出てきます。「さばき(טָפַחְמָ)を行う(אָצַחְ)」、「さばき(טָפַחְמָ)を執り行う(אָצַחְ)」、「さばき(טָפַחְמָ)を確立する(רָשִׁי)」となっています。マタイは 2 回で「さばき(טָפַחְמָ)を告げ(אָצַחְ)」と「さばき(טָפַחְמָ)を勝利に導く(אָצַחְ)」です。マタイが 2 回なのは、イザヤ書の 2 回目と 3 回目を合体しているからです。新改訳 2017 では「さばき」と訳されていますが、新改訳改定第三版、岩波訳、関根訳は「公義」と訳しています。口語訳は「道」、新共同訳は「裁き」、聖書教会共同訳は「公

正」、中澤訳は「定め」、フランシスコ会訳では「正しい法」、バルバロ訳は「公正」、ATD 訳では「判決」と訳しています。聖書によって訳語がまちまちですが、原語である「ミシュパート」(מִשְׁפָּט)はそのような多様な意味合いがあることを示唆しています。したがってこの「ミシュパート」は、**神の統治概念を統括する語彙**だと理解できます。それゆえ、「ミシュパート」を天の御国における「神の統治(支配)」理念と考えることができます。

⑤ 主のしもべが、どこで、だれのさばきを「行い、執り行い、確立される」のかと言え、それは、イザヤ書では「地」における「国々」(מְלָכִים)と「島々」(כְּנָעִים)です。マタイではいずれも「異邦人」(גוֹיִם)となっています。なぜ「主のしもべ」はイスラエルではなく、異邦人においてミシュパートされるのでしょうか。実はここが重要なところです。本来、もうひとりの「主のしもべ」がイザヤ書 42 章 14 以降に描かれているのですが、その「主のしもべ」とは「イスラエル」のことを指しているのです。神のご計画においては、この「主のしもべイスラエル」こそが、地の「国々」、および「島々」に、神の支配(統治)をもたらす器とされたのです。ところが彼らは「主の道に歩もうとせず、その教えに聞き従わなかった」(イザヤ 42:24)のために、神はそれに代わるひとりの「主のしもべなるメシア」を立てられたのです。これが「主のしもべ」の歌とされている所以です。このあたりのことは後程、再び取り上げたいと思います。

⑥ マタイ 12 章 19 節のヘブル語訳の「彼は言い争わず、叫ばず、通りでその声を聞く者もない」は、イザヤ書 42 章 2 節の本文と全く同じです。三つの動詞「ツァーアク」(צָעַק)「ナーサー」(נָסָה)「シャーマ」(שָׁמַע)が否定されています。往々にして敵対する者に対しては、どなって相手を威圧しようするものです。そのために対立は憎しみとなってしまいますが、「主のしもべ」は決してそのようなことはしないのです。言葉の争いではなく、落ち着きをもって勝利する、柔和な「しもべ」なのです。

⑦ マタイの 12 章 20 節に「傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともない。さばきを勝利に導くまで」とあります。同じくイザヤ書 42 章 3 節にも「傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともなく」とあり、この比喩的表現はあくまでも、主のしもべが「真実をもってさばきを執り行い、衰えず、くじけることなく、ついには地にさばきを確立する」ためなのです。とすれば、神の統治において、「**傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともない**」とはどういう意味なのでしょう。実はここが今回のメッセージの最も重要な部分です。

(2) 「傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともない」とは

●「傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともない」は同義的パラレリズムです。「傷んだ葦」と「くすぶる灯芯」の比喩的表現について、岩波訳の注では「イスラエルの侵害されて来た領土、失われゆく自由といった政治的情況を意味する」という解釈と、「神の愛への信頼が薄れて信仰が死に瀕した宗教的心情の描写である」という解釈の二つの意味合いを含んでいるとしています。フランシスコ会訳は「折れた葦」と「くすぶる灯心」を、「打ち砕かれ、死んだも同然のイスラエルを指している」と註解しています。しかし多くの場合この二つの比喩は「抑圧された者、最も弱い者を示唆する表現」だとし、それを「折ることもなく」「消すこともない」のは、メシア・イエシュアの最も弱い者をも傷つけない思いやりのある

「しもべ」の姿を描いていると説明されます。それは決して間違っていないです。むしろそうした福祉理念は、神のみおしえ(トラー)の中に明確に記されているからです。しかしここでの比喻の真意は、「トラーに対する主のしもべの姿勢が説明されている」と考えます。

● ということかと言えば、「葦」という言葉はヘブル語の「カーネ」(קֶנֶה)で、実際、LXX 訳は「葦」を意味する「カルモス」(κάλαμος)が使われています。しかし「カーネ」(קֶנֶה)にはまっすぐに立つ葦のように、「物差し、尺度、法則、原理、基準」を表す意味があります。ギリシア語の「カノン」(κανων)も、原義は「葦」(「カーネ」)です。ちなみに教会が正式に認めた教義・信仰生活の基準となる文書である聖書を「正典」と言いますが、それは「カノン」(κανων)の訳です。いずれにしても、ここでは主のしもべが神のトラー(教え)によって御国を確立することが預言されているのです。このように考えるならば、「痛んだ葦を折ることもなく」とは、痛んでしまった神の律法(トラー)を再び真っ直ぐに立たせて、回復させることを意味していないのでしょうか。また「灯心」(「ピシュター」פִּישְׁטָר)も、詩篇 119 篇 105 節の「あなたのみことばは私の足の**ともしび**(「ネール」נֶר)、私の道の**光**(「オール」אור)です」とあるように、神のトラーを表わす類義語の比喻と言えます。とすれば、「くすぶる灯芯を消すこともなく」も、消えかけている神のトラーを、しもべなるメシアが再び燃え立たせることを意味していると考えられるのです。

● 「わたしが来たのは律法(トラー)や預言者を廃棄するためだと思っはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。」(マタイ 5:17)というイエシュアのみことばがあるように、イエシュアはパリサイ派や律法学者たちによって歪曲されてしまったトラーの解釈を改革して、真のトラーを回復しようとしているということです。それは次の箇所によっても理解が可能です。

● イザヤ書 42 章 4 節本文にも「島々も**そのおしえ**を待ち望む」とあるからです。「島々」は「異邦人」のことです。その異邦人が待ち望んでいるのは、「主のしもべなるメシア」の語る「**みおしえ**」、すなわち「神のトラー」なのです。ところがマタイではその部分が「**彼の名(Ωψ)**」として引用されているのです。これはどのように考えたら良いのでしょうか。

● LXX 訳ではイザヤ42章4節で「名」を表わす「オノマ」(ὄνομα)が使われています。にもかかわらず、LXXを日本語に訳した秦剛平氏はヘブル語本文と同様に「**教え**」と訳しています(しかも「ノモス」(νόμος)と読みが入っています)。さらには脚注には「異民族の者たちは彼の教えに望みをかける—この語句はマタイ12:21で引用されている」と記しています。マタイ福音書のどんな訳に「教え」とあるのかは明記されていませんが、少なくとも、新改訳と新共同訳は「異邦人は彼の**名**に望みをかける」と訳しています。尾山訳は「名」も「教え」もなく、ただ「彼に望みをかける」と訳しています。どのように理解すればよいのか迷ってしまうところですが、次のように考えることができます。名は本質を表わすわけですから、「教え」も「名」も本来的には「同一」でなければなりません。その意味では、「**彼の名**」も「**彼の教え**」も**同義とみなすことができるのです**。イエシュアという名は、新しい契約においては、**神の律法(教え)を私たちがのうちに書き記して、それを行なえるようにしてくださる救い主**なのですから。

(3) 待ち望む

●イザヤ書 42 章 4 節の「島々もそのおしえを待ち望む」も、マタイの 12 章 21 節の「異邦人は彼の名に望みをかける」も、太字の部分はいずれも動詞「ヤー・ハル」(לְהַיָּתִיר)です。この動詞は主を信頼しながら静かに待つことを意味します。将来なされる神の善を信じて今日を生き抜く力を得るというニュアンスをもった言葉です。異邦人である私たちはそのようにして、主の預言を信じて「待ち望んでいる」のです。

●このように、主のしもべであるメシア・イエシュアの使命は「みことばの回復」、すなわちイエシュアは神の「トーラー」を回復するために遣わされた改革者と言えます。それが 4 節の「地に神のミシュパートを打ち立てる」ことと密接な関係にあるのです。しかも主のしもべはそのおしえ(トーラー)の回復のためには、決して「衰えることもなく、くじけることもない」のです。単に、優しい、柔和な方というだけでは神のミシュパートを打ち立てることはできません。異邦人である私たちは、「彼(主のしもべ)のおしえ(トーラー)を待ち望む」ようになることが預言されています。とすれば、これからの時代は神のことばが速度を増して開かれていく時代になると信じます。ヘブル語やギリシア語を学ぶことも、神のことばの確かさを確信させるものでなければなりません。

●天の御国(神の国)は地を治める王がおり、またその王の支配のもとに民(イスラエルと異邦人)がいます。王はその民を永遠のトーラーをもって統治されるのです。



【新改訳 2017】イザヤ書 2 章 2～3 節

2 終わりの日に、【主】の家の山は山々の頂に堅く立ち、もろもろの丘より高くそびえ立つ。

そこにすべての国々が流れて来る。

3 多くの民族が来て言う。「さあ、【主】の山、ヤコブの神の家の上ろう。

主はご自分の道を私たちに教えてください。私たちはその道筋を進もう。」

それは、シオンからみおしえ(הַלְוָה)が、エルサレムから【主】のことばが出るからだ。

2. トーラーを異邦人に輝かすことに失敗したイスラエル

●最後に、神のおしえ(トーラー)に聞き従わなかったもう一人の「主のしもべイスラエル」についても、同じくイザヤ書 42 章から簡単に学びたいと思います。これはイエシュアの時代に如実に起こることを預言しています。

【新改訳 2017】イザヤ書 42 章 18～24 節

18 耳の聞こえない者たちよ、聞け。目の見えない者たちよ、目を凝らして見よ。

19 わたしのしもべほど目の見えない者が、だれかほかにいるだろうか。わたしが送る使者ほど耳の聞こえない者が、ほかにいるだろうか。わたしと和解した者のような目の見えない者、【主】のしもべのような目の見えない者が、

だれかほかにいるだろうか。

20 あなたは多くを見ながら、心を留めない。耳が開いているのに、聞こうとしない。」

21 【主】はご自分の義のために望まれた。みおしえを広め、これを輝かすことを。

22 しかし、これは、かすめ奪われ略奪された民、彼らはみな穴の中に陥れられ、獄屋に閉じ込められた。

かすめ奪われても、助け出す者はなく、略奪されても、返せと言う者もない。

23 あなたがたのうち、だれがこれに耳を傾け、後々のために注意して聞くだろうか。

24 だれがヤコブを、奪い取る者に渡したのか。イスラエルを、かすめ奪う者に。それは【主】ではないか。

私たちはこの方の前に罪ある者となり、主の道に歩もうとせず、そのおしえに聞き従わなかった。

●21 節で、【主】はご自分の義のために、イスラエルの民がみおしえ(トラー)を広め、これを異邦人に輝かすことを望まれたにもかかわらず、彼らは主の道に歩もうとせず、そのおしえ(トラー)に聞き従わなかったことが預言されています。それゆえイスラエルに代わって踏み直す 42 章 1~4 節の「主のしもべ」が必要だったのです。18 節以降の部分はマタイ 12 章には記されていませんが、マタイはイザヤ 42 章の「主のしもべの歌」を引用することで、文脈として、イスラエルの民に起こる預言を伝えたかったと考えられます。

●神によって選ばれたイスラエルの心の頑なさ尋常ではありません。しかし神のご計画には奥深さがあります。彼らがキリストに心を開かなかったために異邦人にその恵みが回って来たのです。彼らの頑なさによって、異邦人が神のトラーを待ち望むようになるのです。とはいえ、イスラエルに対する神のあわれみは決して失われていません。彼らに対するこの契約は反故にはならず、神のご計画は終わりの日に、すなわちキリストの地上再臨の時に「イスラエルの残りの者」に成就するのです。

【新改訳 2017】ローマ人への手紙 11 章 33 節

ああ、神の知恵と知識の富は、なんと深いことでしょう。

神のさばき(「ミシュパート」מִשְׁפָּט)はなんと知り尽くしがたく、

神の道はなんと極めがたいことでしょう。

2019.2.24